

津久見市都市計画マスタープラン策定の住民参加方法

1. なぜ、住民参加か？

（住民参加の意味）

本市では、都市計画マスタープランの策定にあたり、行政だけで考えるのではなく、実際に生活されている、より多く市民の方々の意見が反映されたものを目指しています。そのため、市民の方々と一緒にどのようなまちづくりを目指していくべきか、を自由に話し合える場として、「住民参加」を実施します。

（住民会議の開催により、期待する効果）

- ・市民の中から、今後の地域のまちづくりリーダーの発掘、人材育成
- ・都市計画マスタープランの策定以外の他のまちづくりでも活躍できるような市民体制の確立
- ・地域だけでなく、地域を越えた横断的な交流の創造

（住民参加が担う役割）

今年度）

- ・都市計画マスタープラン策定期間中は、主として「地域別構想」の策定に当たり、市民よりご自身がお住まいの地域に対する意見聴取を予定。

来年度以降）

- ・各地域の住民参加者が主体となり、積極的にまちづくり活動を行ってもらう。（その支援を行政が行っていく。）

（住民参加による、意見の反映方針）

- ・都市計画マスタープランは、「正式名称：都市計画基本方針」と言われるように、本市の都市計画に関する基本的な方針を定めるもので、「本市のまちづくりのあるべき姿」と言えるものです。
- ・そのため、市民のみなさまと話し合われた内容は、そのまま全て実現する、というのではなく、基本的な方針として、主として都市計画マスタープランの「地域別構想」に反映することになります。さらに、それらの内、全市的な影響があるものについては、「全体構想」にも反映されることになります。
- ・みなさまのご意見は、「まちづくりの基本的な方針」として反映されているわけですから大きな方向性は、都市計画マスタープランの「将来のまちの姿」として描かれています。
- ・住民参加が終わっても、まちづくりが終わるわけではありません。これから先、各学区や自治会などで、都市計画マスタープランの「将来のまちの姿」を踏まえた、さらに具体的な「まちづくりがスタート」します。

2. 住民参加の手法（案）

（住民参加の主旨）

- ・計画段階から市民が主体的に参加することにより、行政と市民のまちづくりに対する目的や方向性の共有化が期待できること。
- ・まちづくりの主役は行政ではなく市民であることから、主役の意見を忠実に聴取する
- ・できるだけ多くの方が主体的に参加できること
- ・今後も各々の地域でまちづくりのリーダーを担うための初動期のきっかけづくり
- ・地域だけでなく、地域を結ぶ横断的な意見も抽出した住民参加であること

「津久見市都市計画マスタープラン」の策定に当たっては、特に「地域別構想」の策定について主体的にご意見を聴取することを目的に、住民参加を実施します。その手法として、次の2つを検討しています。

（１）「二中学校地区」「一中学校地区（網代地区まで）」→ワークショップ方式

（２）「半島・島嶼地区」→アンケート方式

理由：人口集中地区には、一度に多数の市民に参加していただく場を設定していくことにより、短期間で意見聴取の効率化を図るためです。

（ワークショップの特徴）

ワークショップの採用に当たっては、次のようなメリットがあると考えました。

- ・地域ごとにグループ分けを行い、多様な参加の受け皿となることが可能
- ・運営スタッフのサポートの下、ファシリテーターを担っていただくことにより、将来のまちづくりのリーダーの発掘、育成が期待できる
- ・ワイワイガヤガヤとたのしい雰囲気づくりがしやすいことにより、地域住民の交流が期待できること

（半島・島嶼地区アンケートについて）

「二中学校地区」「一中学校地区（網代地区まで）」でワークショップを実施する際のテーマについて、それが聞き取れるアンケート調査票を作成し、該当地区に配布することとします。これにより、「二中学校地区」「一中学校地区（網代地区まで）」と「半島・島嶼地区」の聞き取り内容に極端な差異が発生しないよう配慮いたします。

ワークショップでは、基本的に次のような方針で実施します。

- (1)「二中学校地区」「一中学校地区（網代地区まで）」とも、計３回実施します。
- (2)各地区は、お互いの意見を聞き、全市的あるいは各地域のまちづくりの参考とすることを狙いとし、同一同時間に同会場にて実施します。
- (3)【本日のご相談事項】「津久見市都市計画マスタープラン策定委員会」の委員の皆様にもご参加いただき、アドバイスあるいは今後の地域別構想策定の参考にさせていただきます。

今でこそまちづくりの住民参加手法として一般的に広まってきた手法ですが、そもそもワークショップとはどのような意味でしょう？

(ワークショップの三つの必須条件)

(1) 場づくり → ワークショップの運営人数や体制
(2) ファシリテーター → 行政職員、策定委員（案）、その他地域の世話役となる人（キーパーソン）
(3) プログラム（案） → 本資料「5P」より詳述

（１ 場づくり）

まず初めは、ワークショップを行う場をどのように作るかという「場づくり」です。ワークショップは通常、**お互いの顔が見える範囲で安心した環境をつくりながら行うことが多いので、人数は10～20名くらいで行うことが多いです。**「輪」になって座ることは、慣れないと自分がむき出しになった感じで落ち着かないかもしれませんが、一人ひとりがその場を担うかけがえのない一部なのだ、という自覚を促します。

（２ ファシリテーター）

ワークショップを進行させていくのは、先生でなく「ファシリテーター」です。もともと「容易にする、促進する」などの意味の英語 *facilitate* からきている言葉です。日本語では「進行役」「進行促進役」「そそのかし役」「引き出し役」など意識されることもありますが、カタカナのままで使われることが増えてきました。

人が集う場で、それぞれのやる気や経験や知恵を上手に引き出しながら、お互いの学びあいやクリエイティブな議論、時には紛争解決を促進していく役割です。ファシリテーターには、「待つ」姿勢が必要です。参加者が主体であるのだから、自分がいくらわかっていても押し付けてはいけません。押さえないと、せっかくの主体的かつ自発的なグループプロセスを台無しにしてしまいます。

（３ プログラム）

三つの必須条件の最後は、ワークショップを構成する「プログラム」があげられます。

ワークショップもある目的のために、限られた時間の枠内でやる以上、よく練られたプログラムのデザインが必要です。

プログラム・デザインの基本は、「**つかみ**」「**本体**」「**まとめ**」の**三つのステップ**を考慮して組み立てることです。

「つかみ」とは参加者が有効な学びや創造が起こりやすくなるように、目的を共有し、モチベーションを高め、お互いに安心して心を開けるような雰囲気を作ることです。

「本体」とは、目的を達成するための肝となる部分で、通常いくつかのアクティビティの積み重ねになるでしょう。

「まとめ」とは、体験したことをふりかえり、分かち合う締めの部分。そこでの学びをその後の日常の中でどうつなげていくかにも気を配りましょう。

「津久見市都市計画マスタープラン」のワークショッププログラム（案）

■ 第 1 回ワークショップ

（目的）

- ・都市計画マスタープランの理解、そのための話題提供
- ・地域別カルテを参考に、地域の良いところ、悪いところ等を探しに自主タウンウォッチングしていただいた結果を公表していただき、課題マップを作成し、地域別構想の地域の課題を抽出する。

※第 1 回ワークショップ開催前に、参加希望者には“自主タウンウォッチング”を事前をお願いしておく、第 1 回目のワークショップの意見が量、質ともに精度が高くなります。

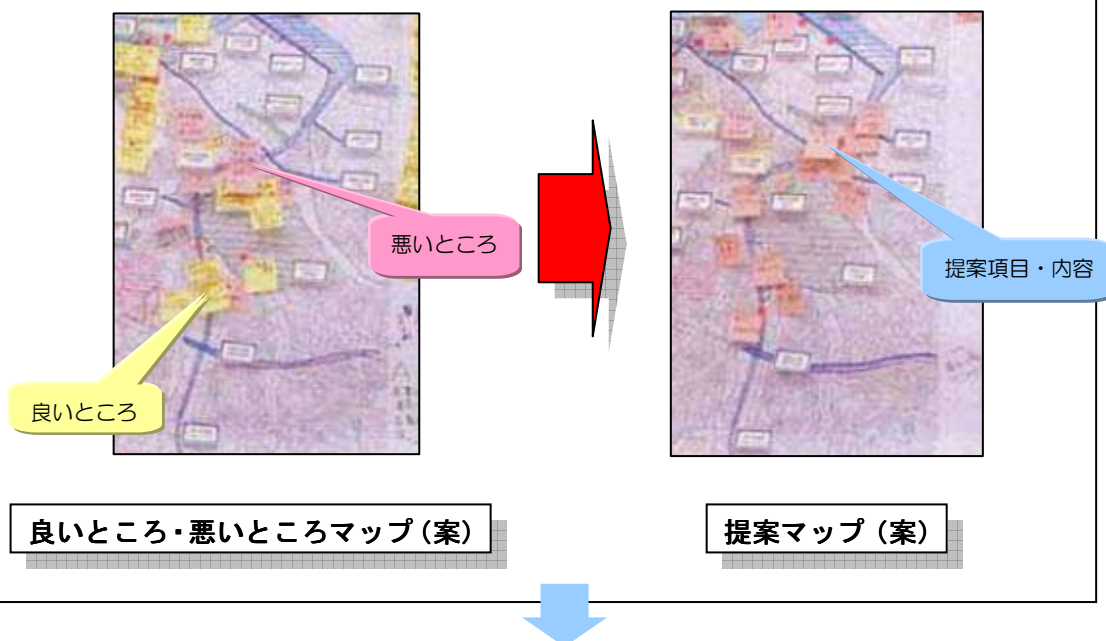
（ワークショップ）

（ワークショップ）

- ・自己紹介、事前にお渡ししたシートへ、わが地域の良いところ、悪いところを落とし込んだものの発表等。結果を「**課題マップ**」にまとめます。
- ・意見を分類し、「**これからの地域を考えていくためのテーマ**」を抽出します。

（話題提供）

- ・都市計画マスタープランとは



■第2回ワークショップ

(目的)

- ・地域別構想の中心である「まちづくり構想図」を作成するたたき台となる、「提案マップ」を作成する。
-
- ・ 前回のワークショップの結果を取りまとめたものを題材に、将来の大まかな方針を地図上に落とした「**提案マップ**」を作成します。同時に「**地域のまちづくりキャッチフレーズ**」を検討します。



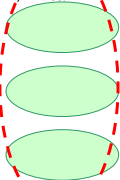
■第3回ワークショップ

(目的)

- ・まちづくり構想図（案）の作成
-

1、2回ワークショップの結果を示すとともに、各地域別の取りまとめ案を示し、これをたたき台として議論。その結果を**まちづくり構想図**として地域別構想の核とします。今後は、地元の協議会の設立を目指し、地域別構想を生かしたまちづくりを行っていただくことになります。

地域別構想の策定については、素案作成後、随時見直す期間を設け、計画の改善に努めるとともに、改訂した情報については随時フィードバックできる仕組みづくりを行います。

	地域のいろいろな問題点 や課題	これからの地域づくりに生かせる うそも / やらねば (地域課題)	地域を考えるキーワード (○○をききまことかあや／○○しよう。)
10 年後の 地域を みんな で考え よう！	a) 土地利用 	この内容は、ワークショップ でいただいた、地域の課題や 課題について、土地利用、道 路・交通施設、自然環境の保 全・形成の3つに分類します。 (第1回ワークショップ時)	

